ウィリアム・クーパー

1　ジョン・ギルピンのおかしな物語

想定外の遠乗りと無事ご帰還の顛末記

1　善良な市民　ジョン・ギルピン
　　信頼厚く誉れも高い
加えて　名高いロンドンの
　　義勇軍の大将だった

2　ジョン・ギルピンの女房が言った　5
　　わたしたちときたら　結婚このかた
平々凡々の二十年が過ぎたけど
　　一日の休みもなかったわ

3　明日は結婚記念日よ
　　エドモントンのベル亭で　10
お祝いとしゃれこみましょう
　　二頭立ての馬車をしつらえて

4　妹とその子ども
　　わたしと三人の子どもたちで
馬車はいっぱい　だからおまえさん　15
　　馬で後(あと)からついてきて

5　間髪入れずギルピン応(こた)えた
　　女のなかで尊敬するのは
たったひとり　わが最愛の女房どの
　　何でもおまえの言う通り　20

6　我こそは世間様にも名の知れた
　　太っ腹の生地商人
親友の生地加工屋が
　　馬を貸してくれるだろうよ

7　ギルピンの女房が言うことには　まあよかった　25
　　ベル亭のワインは高いから
自家製ワインを持参しましょ
　　色も澄み具合も負けやしないわ

8　ジョン・ギルピンは大喜び
　　愛する女房にキスをした　30
お楽しみを思いついても
　　倹約を忘れぬ賢夫人

9　その日となって　馬車が来た
　　でも　戸口の真ん前には
横付けならぬと女房のお達し　35
　　お高くとまってると陰口たたかれぬように

10　三軒先に馬車は止まり
　　そこで全員乗り込む手はず
六人のご一行は上を下への大さわぎ
　　我先にと馬車をめがけて突進した　40

11　ムチはピシピシ　車輪はガラガラ
　　一行はいつにないはしゃぎよう
車輪の下で石ころゴロゴロ
　　チープサイド通りはお祭りのよう

12　借りた馬の脇でジョン・ギルピン　45
　　豊かなたてがみをはっしと掴み
大急ぎで飛び乗ったが
　　すぐに馬から降りるはめ

13　鞍に手をかけ
　　いざ旅立ちというときに　50
ふと振り返ると
　　三人のお客の姿

14　馬から降りて商売商売
　　時間のロスはたしかに残念
でも　儲けのロスは　55
　　ギルピンにはもっと耐え難い

15　あれやこれやと品定め
　　三人の客は手間取った
そのとき　女中のベティが二階から降りてきて
　　「ワインをお忘れですよ」　60

16　よし　わかった　持って来てくれ
　　革のベルトも一緒にな
　義勇団の軍事教練で
　　自慢の剣を吊るすあのベルト

17　万事行き届いたギルピンの女房　　65
　　石のボトル二本を揃え
　お気に入りのワインを入れて
　　厳重に保管していた

18　それぞれボトルには円(まる)い把手(とって)が付いていた
　　ギルピンはそこにベルトを通して　　70
　ボトルを両脇にぶら下げると
　　左右のバランスみごとにとれた

19　それから　頭から爪先まで
　　精一杯着飾ろうと
　丁寧にブラシのかかった赤いロングコートを　　75
　　さっと勇ましく羽織った

20　再びジョン・ギルピンは
　　駿馬に飛び乗り
　石ころ道をそろりそろりと
　　たいそう用心して進んでいった　　80

21　蹄鉄で護られた足の下
　　道はなめらかと判るやいなや
　馬は鼻息荒く駆け出して
　　鞍にまたがるギルピンの尻はヒリヒリ

22　ギルピンは叫んだ　どうどう　落ち着け　　85
　　だが　叫んでも無駄だった
　駆足はじきに全速力
　　轡(くつわ)も手網も役たたず

23　致し方なく前傾姿勢
　　まっすぐ坐ってはいられない　　90
　両手でたてがみをはっしと掴み
　　落っこちないよう一所懸命

24　馬にすれば初めてのこと

轡(くつわ)も手網も　今まで引かれたことはない
背中に何を乗せていたかと
　ますますびっくりするばかり

25　ギルピンはやけっぱちで駆けていく
　帽子も鬘(かつら)も飛んでいく
家を出る時には夢思わず
　とんだ珍事にやけのやんぱち

26　風が吹きつけ　コートははためき
　ギルピンはまるで赤いロングの吹流し
ボタンとボタン掛けがとれ
　ついにコートは飛んでった

27　人々に見えたのは
　腰にぶら下げた二本のボトル
両脇でボトルはブラブラ
　野次馬はやんやの喝采

28　犬が吠え　子どもが叫び
　窓という窓が開かれた
野次馬は口々に　あっぱれ　おみごと
　大声で喚きたてた

29　ギルピンはどんどん駆けてゆく
　評判がすぐに広まった
競馬だぜ　しかもハンデ戦だとよ
　掛け金は千ポンド

30　ギルピンが全速力で近づくと
　通行料取り立て人らは
一瞬にしてみごとな早技
　ゲートを広々と開け放った

31　前傾姿勢で通り抜け
　下げた頭から湯気が立つ
ギルピンの尻のあたりで
　二本のボトルはぶつかり合って大破した

32　ワインは道に流れ出し
　見るも哀れや　もったいなしや

馬の脇腹を流れて湯気を立て
　　馬にバターを塗ったかのよう

33　でもまだ　ハンデ戦競馬の真っ最中
　　革のベルトははずれちゃいない　130
野次馬に見えるのはボトルの首
　　腰でブラブラ揺れている

34　ギルピンは馬乗り曲芸を披露して
　　賑やかなイズリントンを駆け抜けて
ついに　きれいなエドモントンの　135
　　ウォッシュの沼にドボンした

35　エドモントンの道の両側に
　　ギルピンは泥水を跳ね飛ばした
柄を持ってクルクル回せば水滴飛び散るモップのよう
　　はたまた　泥水飛ばす野ガモのよう　140

36　エドモントンでは　最愛の女房が
　　ベル亭のバルコニーから見下すと
驚いたことに　優しい亭主が
　　競馬さながら駆けてくる

37　止まれ　止まれ　ジョン・ギルピン　ここがベル亭　145
　　みなでいっせいに叫んだ
食事はできてる　待ちくたびれたわ
　　ギルピンが言った　おれだって腹ぺこだ

38　だが馬は　いっこうに
　　止まる気配なし　150
何故かって　馬の主人がいるのは
　　十マイル先のウェアだから

39　ギルピンは矢のように速く駆け抜けた
　　まるで屈強の射手が放った矢
ギルピンは駆け抜けた　155
　　ここらがちょうど話の真ん中

40　ギルピンは息急き切ってどんどん駆けた
　　止まりたいが止まれない
親友の生地加工屋の家まで行って

ようやく馬は一休み　160

41　おかしな格好のギルピンに
　　加工屋はびっくり仰天
パイプを置いて門へ駆けより
　　ギルピンに話しかけた

42　どうした　どうした　165
　　これは一体　どういう訳だい
どうして鬘(かつら)がないんだい
　　なぜここへ来たんだい

43　ギルピンは頓智の持ち主で
　　時を得たジョークがお得意だった　170
陽気な風を装って
　　加工屋にこう言った

44　馬が行きたいって言うからさ
　　おそらくきっと
帽子も鬘(かつら)も間もなく到着　175
　　今　ここに向かってるところだよ

45　友人ジョン・ギルピンの上機嫌に
　　加工屋は喜んで
一言も言い返さずに
　　家の中へ入っていった　180

46　加工屋は帽子と鬘(かつら)を持って来た
　　鬘(かつら)は後ろの毛がふっさふさ
帽子も被るに悪くはない
　　それぞれ仕立てはよいものだった

47　加工屋は帽子と鬘(かつら)を持ち上げて　185
　　今度は彼が頓智をお披露目
おれの頭はおまえの二倍
　　だから小さくしなけりゃな

48　だがまずは　おまえの顔に付いている
　　泥ハネを拭いてやろう　190
馬を休ませ腹ごしらえだ
　　腹が減っては戦はできめえ

49　ギルピンが言うには　今日はおれの結婚記念日
　　世間さまが胡散臭そうに見るだろよ
女房はエドモントンで食事して　195
　　亭主はウェアで食事など

50　馬にむかってこう言った
　　ベル亭へ急がにゃならん
おまえに付き合ってここまで来たんだ
　　今度はおれに付き合ってくれる番　200

51　ああ　言うも不運　見栄もこれまで
　　またまた　ギルピンには手痛い報い
しゃべっているうち　やかましいロバが
　　おおきな声でいなないたのだ

52　すると馬もいなないた　205
　　まるでライオンの雄叫びを聞いたかのよう
力いっぱい全速力で駆け出した
　　ここへやって来た時さながらに

53　ギルピンはどんどん駆けていき
　　借りた帽子も鬘(かつら)も　210
来たときよりも早く吹っ飛んだ
　　なぜって　大きすぎたから

54　さて一方　ギルピンの女房は
　　亭主が遥か遠くへと
駆け去ったのにびっくり仰天　215
　　半クラウン硬貨を取り出した

55　ベル亭まで馬車を駆ってきた
　　若い御者に言いつけた
これはあなたへの心付け
　　亭主を無事に連れ戻してちょうだい　220

56　御者が馬を駆ってしばらくいくと
　　ギルピンが全速力で戻ってきた
すぐさま亭主を止めようと
　　ギルピンの馬の手網を引っ掴んだ

57　うまくいったと思いきや　225
　　手綱は御者の手をすり抜けた
　馬はますますびっくり仰天
　　もっと速く駆け出した

58　ギルピンはどんどん駆けていき
　　御者も後を追いかける　230
　御者の馬も大喜び
　　ゴロゴロひっぱる車輪はなくて気楽な身分

59　六人の紳士たちが道端で見たのは
　　飛ぶように駆けていくジョン・ギルピン
　その後を追っていく若い御者　235
　　六人はやんやの大喝采

60　止まれ盗人（ぬすっと）　止まれ盗人（ぬすっと）　追剥ぎめ
　　みな口々にわめきたて
　通行人も我れ先にと
　　いっしょになって競馬した　240

61　またもや料金所のゲートが
　　さっと大きく開けられた
　今度も取り立て人たちは
　　ギルピンは競馬の最中と勘違い

62　ギルピンはどんどん駆けて　競馬に勝った　245
　　一番乗りで町に到着
　馬に乗ったその場所でようやく止まり
　　乗った場所でまた降りた

63　さあ　うたおう　王様万歳
　　ギルピン万歳　250
　ギルピンが次に遠乗りするときも
　　また彼の競馬を見たいもの

（中島久代訳）